

FSCの設立趣旨 土地、植物、動物及びそれらを取り巻く環境を生命系として教育・研究を行うとともに、これらの研究成果を通して、広く地域社会の発展に寄与することを目的とする。

マンクス・ロフタンと北里大学

4本角の茶色くて小さい羊、青森県での生活はじまる。

マンクス・ロフタンとは

4本角の羊をご存じですか？マンクス・ロフタンは、イギリス・マン島に古くから生息する、北欧短尾種に属する原始的なめん羊です。焦げ茶色の顔と脚、茶色～銀色の羊毛が特徴で、見た目の美しさと希少性から、世界中の畜産・織物愛好家に注目されています。

1950年代にはわずか20～30頭にまで減少し、絶滅の危機に瀕していました。しかし、保護活動により品種は再構築され、現在ではマン島とイギリス本土を合わせて約3,000頭にまで回復しています。日本でも飼育されており、希少品種として注目されています。



写真 十和田農場の4本角のマンクス・ロフタンのオス

マンクス・ロフタンの特徴

最大の特徴である角は、2本か4本が一般的で、稀に6本の個体も生まれます。内巻き・外巻き・まっすぐなど、形も多様でとてもユニークです。

体格は成熟時でも約40kgと小柄で軽量ながら、丈夫で身軽なため、90cmの柵も軽々超えていきます。かつては9kg程度だったという文献も残っています。肉量は少ないものの、低コレステロールで風味豊かな赤身肉として評価されています。

有色の羊毛は、個体差により色味が異なり、手織り製品の原材料として珍重されています。

日本のマンクス・ロフタン

日本への導入は、1990年に百瀬正香さん（レア・シープ研究会設立者）によって実現されまし

た。雄5頭・雌15頭が英国から輸入され、百瀬さんの思いに賛同した同志たちによって、5カ所に分散して飼育が開始されました。

その後、国内での頭数が徐々に増加、飼育農場も拡大し、2024年8月現在、血統記録されているマンクス・ロフタンは全国17カ所で90頭に達しています。その中で比較的大きな群れで維持しているのは、北里大学31頭、日本獣医生命科学大学16頭、秋田牧場13頭となっています。

北里大学のマンクス・ロフタン

北里大学にマンクス・ロフタンが初めて導入されたのは、2011年11月。日本獣医生命科学大学富士アニマルファームから、雄1頭・雌1頭が譲渡されました。しかし翌年3月、雄が死亡。妊娠していた雌も残念ながら死産となり、1頭の雌だけが残されました。繁殖の道が閉ざされたかに見えましたが、「どうしても繁殖させたい」という強い思いから、日本獣医生命科学大学に事情を説明したところ、快く再譲渡が決定。2012年11月に再び雄1頭・雌2頭が導入されました。

翌年には3頭の雌が無事に出産し、4頭の子羊が誕生しました。畜舎は賑やかに、そして少し手狭になりました。2024年には、北里大学で飼育されるマンクス・ロフタンは31頭にまで増加しました。現在では、北里大学は国内の希少家畜保存活動の中核的存在として、レア・シープ研究会を介して全国各地の農場へ個体を供給し、品種の分散保存と遺伝的多様性の維持に貢献しています。



写真 初代マンクス・ロフタンのメス

北里大学独自の取り組み

人工授精、精液保存、食肉利用、地産地消、地域普及

人工授精（AI）法の開発と凍結精液の保存

マンクス・ロフタンのような希少品種を維持するうえで不可欠となるのが、人工繁殖技術の応用です。海外からの個体の移動が難しい日本では、精液または受精卵から新しい血統を導入しなければ近親交配が進み、いずれは品種の消滅につながってしまうからです。

現在、羊の凍結精液を用いたAIには腹腔鏡を用いて腹部に穴を開け、外科的に直接子宮内に精液を注入する方法が用いられています。しかし、この方法は特殊な機械と専門的な技術が必要であるため、牛AIのように世界中に普及しているとは言えません。また、動物への負担も非常に大きいものとなります。

そこで、本学・動物生殖学研究室の永野昌志教授は、誰でも実施可能で、動物にやさしい「経膈AI法」の開発に取り組んでいます。この方法は、牛のAIと同様に陰部から人工授精器を挿入する簡便な技術であり、妊娠率の向上と精液保存技術の改良を目指して、研究が進められています。

現在は、家畜改良センター十勝牧場との共同研究も開始され、希少品種の持続的な保存と繁殖に向けた新たな一歩が踏み出されています。

食肉利用の可能性と地域連携

マンクス・ロフタンが普及しない原因の一つとして、産肉性の低さが挙げられます。小柄な彼らは成熟期でも40kg程度と、一般的な肉用種の半分以下ですが、その肉質は低コレステロールで風味豊かと高く評価されています。本学・栄養生理学研究室の濱野美夫教授（農場長）の研究では、珍重される羊毛利用だけでなく、食用としての価値に着目した研究を進めています。

現在は、出荷時期をホゲット（1歳以上2歳未

満）まで延ばし、マンクス・ロフタンならではの濃厚な味わいを引き出すことに成功し、本学キャンパス所在の十和田市および市内の羊肉専門店、本学卒業生経営の牧場との産官学連携のもと、増頭・普及に向けた協議が進められています。



写真 十和田農場のマンクスロフタン

地域貢献・地産地消への協力

青森県産のウールを使った作品づくりを続ける作家、aomori woolの中川麻子さん。

「青森の羊が着てる羊毛があったかくないわけではないっきゃ！」

「せっかく羊が作った毛、みんな捨てちゃうの、もったいないし、いたたまれないんだよ」

初めて出会ったとき、そんな言葉を私たちに投げかけてくれました。それは、まだ北里大学のマンクス・ロフタンの羊毛が世に出回る前のことです。私たちが羊毛の価値に気づいていなかった頃、ゴミだらけの羊毛を持ち帰り、素敵なブランケットに仕立ててくれました。

今では、東京スピニングパーティーを通じて、全国の皆さんにマンクス・ロフタンの羊毛を手にとっていただけるようになりました。中川さんの温かな視点と行動がなければ、こうして商品化されることもなかったでしょう。

東京・スピニングパーティーと北里大学

皆さんに愛される羊毛を 北里大学のマンクスウールが紡ぐ、人と羊の物語

2023年からは専用ブースが設けられ、十和田農場の羊たちの羊毛を“丸ごと”皆さんにお届けできる形となりました。羊毛には、生産者である羊の名前・生年月日・性格・特徴などを添えて販売すると2年目には、「〇〇ちゃんの羊毛、すごくよかった！」「今年は△△ちゃんの羊毛はありますか？」と、羊たちの名前でも認識されるようになりました。

こうした温かい声をいただく一方で、「皆さんに恥ずかしくない羊毛をお渡ししたい」という思いから、私たちも日々気を引き締めて取り組んでいます。そして羊毛を通じて、マンクス・ロフタンという希少品種の魅力、日本で生産される羊の価値、そして、北里大学獣医学部でしかできない経験があることを、多くの方に知っていただけることを願っています。